

子どもに一流の音楽を 群響チケット贈る企業増

法人賛助会員が地元貢献



赤石取締役(左)と演奏会の感想を話す生徒

一流の音楽を企業から地元の子どものプレゼント。群馬交響楽団が法人賛助会員に贈る演奏会のチケットで、地元の子どもの演奏を聞く機会を提供する企業が少しずつ増えている。一般消費者と接点の少ない企業間取引(BtoB)企業にとっては地元への貢献とともに、高校生などに自社を知ってもらういい機会にもなる。群響は「三方よし」の取り組みとアピールし、賛助会員の獲得につなげていきたいと考えた。

さんをリストに、ブラームスのバイオリン協奏曲などを演奏。制服姿の桐生清桜高吹奏楽部の25人が、部の定期演奏会でも使う舞台での熱演を聴き入った。

「バイオリンのピチカート(弦を弾く奏法)まで迫力がすごかった。部員の団原雪さん(2年)はプロの緻密な技術に感激の表情を浮かべた。新井桃華さん(同)は「演奏を始める瞬間、奏者同士の一体感や庄巻で私も練習で意識したい」と話した。

チケットを贈ったのは、産業機械の部品製造などを手がけるタツミ製作所(みどり市大間々町、赤石康生社長)。終演後、部員から感想を聞いた赤石直美取締役は「創業50年を超え、いつか子どもへ貢献したいと

思っていた」と喜んだ。法人賛助会員には年会費10万円、40枚、5万円、18枚の入場回数券が贈られる。回数券は定期演奏会のほか、映画音楽がテーマの会など35ステージ(本年度)のチケットに交換できる。

同社は昨年度から賛助会員となり、福利厚生として社員に提供してきた。本年度は年会費を増やしたこともあり、「地域の宝」(赤石取締役)の子どもにチケットを贈ることを決めた。

同社以外にも、リサイクル事業を手がける中村化成工業(太田市、マーク・ポラー社長)は昨年に続き、おわた芸術学校(同市)の生徒を7月の東毛定演へ招待した。事務局によると、他にも「地元の学校にチケ

ットを寄贈したい」と問い合わせがあるという。法人賛助会員数は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2019年度と20年度は減少した。その後は群響事務局の地道な勧誘活動で増え、昨年度は107社と、コロナ禍前の18年度

の170社を上回っている。群響は25年度までの5年で、鑑賞者増などを目標とする「群響改革プラン」に取り組んでいる。事務局は賛助会員制度が楽団の一層の飛躍や公益財団法人の安定運営に欠かせないとし、「賛

助会員の増加に向け、ブラサルファのメリットを示していきたい」とした。(北沢彰)